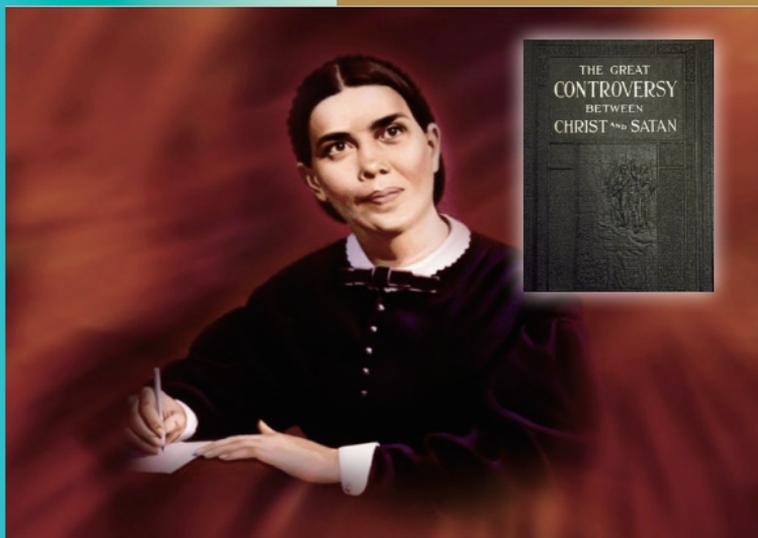


*Spiritual Gift  
on Last days*

# 終末時代における 霊の賜物

Revival Booklet Series No.8



リバイバルシリーズ No.8

E・G・ホワイト  
R・F・コットレル



SUNRISE MINISTRY

# 目次

## Contents

第1部 エレン・G・ホワイト自身の証言 3

---

第2部 終末時代における霊の賜物 16

---

第3部 証の書の重要性 33

---

# 第1部

エレン・G・ホワイト

## 自身の証言

- ・ 聖書と聖霊の証
- ・ 各時代の大争闘の靈感について

(各時代の大争闘 序文より)

E・G・ホワイト

罪がこの世にはいる前には、アダムは創造主と分け隔てのない交わりをしていた。しかし人間が罪を犯して神から離れてからは、人類はこの尊い特権から切り離されてしまった。しかし、救済の計画によって、地上の住民がなお天とのつながりを保つ道が開かれた。神は、聖霊によって人間と交わり、選ばれたしもべたちの啓示によって天来の光を世にお与えになった。人々は、「聖霊に感じ、神によって語った」のである（ペテロ第二・1：21）。

人類歴史における最初の二千五百年間は、書かれた啓示というものはなかった。神から教えられた人々が、その知識を他の人々に伝え、それが父から子へと、次の世代に伝えられていった。神のみことばを書きしるすことは、モーセの時代に始まった。靈感による啓示は、その時靈感の書の中に書きあらわされた。この働きは、創造と律法についての歴史家であるモーセから、福音の最も崇高な真理を記録したヨハネにいたるまで、千六百年の長い間にわたってつづけられた。

聖書は、神をその著者として指し示す。しかし、それは人間の手で書かれた。そしてその種々の書の異なった文体は、それぞれの記者の特徴を表わしている。そこにあらわされている真理は、みな「神の靈感を受けて書かれたものである」が、それは人間のことばで表現されている（テモテ第二・3：16）。限りなきおかたである神は、聖霊によって、ご自分のしもべたちの心

と頭に光をお与えになった。神は、夢とまぼろしと象徴をお与えになった。そして、このようにして真理を啓示された人々は、その思想を人間のことばであらわしたのである。

十誡は、神ご自身によって語られ、神ご自身の手によって書かれた。それは神がおつくりになったものであって、人間のつくったものではない。しかし、神から与えられた真理が人間のことばに表現されている聖書には、神的なものと同人的なものとの結合がみられる。このような結合は、神の子であると同時に人の子であったキリストの性質の中にもあった。このように、「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」ということは、キリストご自身についてと同様に、聖書についても言えるのである（ヨハネ 1：14）。

聖書は、時代が異なり、身分や職業、また知的靈的な才能も広く異なっている人々によって書かれたので、その中の諸書は、そこに示されている主題の性質が異なっていると同時に、その文体にもいちじるしい対照がみられる。それぞれ異なった記者によって、それぞれ異なった表現形式が用いられている。同じ真理を、ある記者は他の記者よりも特にめだって強調していることがよくある。幾人かの記者が、異なった角度と関連から一つの主題を示しているので、浅薄に、不注意に、あるいは偏見をもって、これを読む者には、相違や矛盾があるように思われるかも知れないが、思慮深

い、敬虔な者が、はっきりした眼でこれを読めば、その根底には調和があることに気づくのである。

真理は、いろいろな人によってあらわされているので、いろいろな角度から示されている。ある記者は問題のある一面に特に強い感動を受けている。彼は、自分の経験や自分の知覚力、認識力に合う点を把握している。またある者は、これとは異なった一面を把握している。そしておのおのは、聖霊のみちびきのもとに、自分の心に最も力強く訴えるものを示しているのである。すなわち、それぞれに真理の異なった一面をもっているが、しかしそこには、全体を通じて完全な調和がみられるのである。このようにしてあらわされた真理は、結合して完全な全体を構成し、人生のあらゆる境遇と経験の中にある人々の要求にこたえるのに適したものとなっているのである。

神は、ご自分の真理を、人間を通して世にお伝えになった。そしてご自分の聖霊によって、人々に、この働きをなす資格と能力をお与えになった。神は人を導いて、語るべきことと書くべきこととをえらばせられた。宝は土の器である人間に託されたが、しかしその宝が天来のものであることにはかわりがない。あかしは、人間のことばという不完全な表現を通して伝えられたが、しかしそれは神のあかしである。神を信ずる従順な子らは、その中に、恵みと誠とに満ちた、神の力の栄光を見るのである。

神は、みことばを通して、救いに必要な知識を人間にお与えになった。われわれは、聖書を、神のみこころについての権威ある、まちがいのない啓示として受けとらねばならない。聖書は品性の規準であり、教理を示すものであり、経験を吟味するものである。「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である。それによって、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるのである」(テモテ第二・3：16,17)。

しかし、神がみことばを通してみこころを人間に啓示されたからといって、聖霊のたえざる臨在とみちびきが不要になったわけではない。それどころか、聖霊は、みことばを神のしもべたちに開き、その教えを解明して実行に移させるために、救い主によって約束されたのである。しかも、聖書に靈感を与えたのは聖霊だったのであるから、聖霊の教えがみことばの教えと相反するということとはあり得ないのである。

聖霊は、聖書にとって代わるために与えられたのではないし、また、そのようなものとして与えられるはずもないのである。なぜなら、神のみことばは、すべての教えとすべての経験を吟味する標準であると、はっきり聖書に述べられているからである。使徒ヨハネは言っている。「すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしな

さい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」(ヨハネ第一・4：1)。そしてイザヤは、「律法と証とに求めよ。もし彼らが、この言葉に従って語らないならば、それは彼らのうちに光がないからである」と宣言している(イザヤ書8：20 欽定訳)。

一部の人々が、自分たちは聖霊の光を受けたから、もはや神のみことばによってみちびかれる必要はないと公言するような誤りを犯しているために、聖霊の働きについて大きな非難が投げかけられている。こういう人々は、自分の印象に支配され、それを魂に語る神の声とみなしている。しかし彼らを支配しているのは、神の霊ではない。このように、心の印象に従って、聖書を見做すことは、混乱と欺瞞と滅亡に陥るだけである。それはまた、サタンの計画を助けるだけである。聖霊の働きはキリストの教会にとって非常に重要であるために、極端な人々や狂信的な人々の誤りを通して、聖霊の働きを軽べつし、主ご自身がお与えになったこの力の源を神の民に見做させるのが、サタンの策略の一つなのである。

聖霊は、神のみことばと調和して、新約時代にその働きをつづけるのであった。旧新約聖書が与えられつつあった時代に、聖霊は、聖書の中にあらわされるはずの啓示とは別に、個々人の心に光を与えることをやめなかった。聖書として与えられるものとは無関係な事柄において、人々が聖霊を通して警告と譴責と勧告

と教えを受けたことが、聖書自体の中に述べられている。また、その語ったことばが記録されていない各時代の預言者の名もあげられている。同様に、聖書が完成されてからも、聖霊は、依然としてその働きをつづけ、神の民を照らし、警告し、慰めるのであった。

イエスは弟子たちに、次のように約束された。「助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。」「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは……きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」とお約束になった（ヨハネ 14:26,16:13）。これらの約束は、使徒時代に限られるのではなく、各時代のキリスト教会にまで及ぶものであることを、聖書ははっきり教えている。救い主は、ご自分に従う者たちに、「わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と保証しておられる（マタイ 28:20）。パウロもまた、聖霊の賜物とその力のあらわれが教会に与えられたのは、「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至」らせるために、みたまの賜物と啓示が教会内に与えられたと宣言している（エペソ 4:

12,13)。

エペソの信者たちのために、使徒パウロは、「どうか、わたしたちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、知恵と啓示との霊をあなたがたに賜わって神を認めさせ、あなたがたの心の目を明らかにして下さるように、そして、あなたがたが神に召されていただいている望みがどんなものであるか、……また、神の力強い活動によって働く力が、わたしたち信じる者にとっていかに絶大なものであるかを、あなたがたが知るに至るように」と祈った（エペソ 1：17－19）。パウロがエペソの教会のために、このように祈り求めた祝福というのは、人々の理解力を照らし、神の聖なるみことばのうちにある深い事柄を心を開き示すための、聖霊の働きであった。

ペンテコステの日、聖霊の驚くべき力の顕現の後で、ペテロは、人々に、罪のゆるしを得るために、悔い改めてキリストの名によってバプテスマを受けるようすすめ、「そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである」と言った（使徒行伝 2：38,39）。

神の大いなる日の光景と直接関連して、主は、預言者ヨエルによって神の霊の特別なあらわれを約束しておられる。「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者

に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る」(ヨエル書 2:28)。この預言は、ペンテコステの日に聖霊がくださったことによって、部分的な成就をみた。しかしそれは、福音の最後の働きに伴う神の恵みのあらわれにおいて、完全に成就するのである。

善と悪との大争闘は、時の終わりにいたって、ますます激しさを加えるのである。すべての時代において、サタンの怒りはキリストの教会に向けられてきた。そして神は、ご自分の民がサタンの勢力に対して強く立つことができるように、恵みと霊を与えてこられた。キリストの使徒たちが、福音を世界に伝え、またそれを将来の時代のために記録しなければならなかった時、彼らは聖霊による光を特別に与えられた。しかし、教会が最後の救いに近づくにつれて、サタンはますます強い力をもって働くのである。彼は、「自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって」やってくるのである(黙示録 12:12)。彼は、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議」をもって働く(テサロニケ第二・2:9)。かつて神の天使の中で最高の地位にあった偉大な頭脳の持ち主が、六千年の間、欺瞞と滅びの働きに全力をかたむけてきた。この長年の争闘の間に、サタンが身につけた腕前と狡猾さ、またその間にますますひどくなった残虐さの、あらんかぎりをつくして、彼は最後の争闘において神の民に迫るのである。この危機の時

に当たって、キリストに従う者たちは、主の再臨の警告を世に伝えねばならない。そして民は、キリストがおいでになる時、「しみもなくきずもなく」彼の前に立つことができるように、備えをしなければならない（ペテロ第二・3：14）。今日、神の恵みと力が特別にさずけられることは、使徒時代に劣らず必要なのである。

長年つづけられている善と悪との争闘の場面は、聖霊の光によって、本書の著者に示された。ときどきわたしは、生命の君であり、救いの創始者であるキリストと、悪の君であり、罪の創始者であり、神の聖なる律法を初めて破った者であるサタンとの間の、各時代の争闘の経過を見せられた。キリストに対するサタンの敵意は、キリストに従う者たちにも向けられてきた。サタンは、神の律法に対する憎しみと欺瞞的策略によって、誤謬を真理に見せかけ、神の律法を人間の律法と取り替え、創造主よりも被造物のほうを人々に拝ませるのであるが、そうした憎しみや策略は、過去のすべての全歴史の中に見られるのである。神の品性について誤った印象を人にあたえ、創造主についてつわりの観念を人にいだかせ、こうして愛よりはむしろ恐怖と憎しみをもって神を見させようとするサタンの努力、また、神の律法を捨てて、その要求から解放されたと人々に考えさせようとするサタンの努力、そして、彼の欺瞞に抵抗しようとする者に対する迫害などが、各時代にわたって着々とつづけられてきた。こ

うしたことは、父祖たち、預言者たち、使徒たち、そして殉教者たちや宗教改革者たちの歴史の中にみられるのである。

最後の争闘において、サタンは同じ政策を用い、同じ精神を発揮して、過去のすべての時代と同じように、同じ目的のために働くのである。これまでに見られたことが、これからも見られるであろう。ただ異なるところは、きたるべき争闘が、かつて世にみられなかったほどの恐ろしい激しさをもったものであるということである。サタンの欺瞞はもっと巧妙になり、彼の攻撃はもっと断固たるものとなる。彼は、もしできるなら、選民をも惑わそうとするであろう（マルコ 13：22 参照）。

神の霊がわたしの心に、神のみことばの大いなる真理を開き、過去と未来の光景を示されたとき、わたしは、過去の争闘の歴史をたどるために、そして特に、急速に近づいている未来の争闘に照明を当てるために、自分にこのように示されたことを他の人々に知らせるよう命じられた。この目的を果たすにあたって、わたしは、各時代に世に与えられた大いなる試金石としての真理をたどることができるように、教会歴史における事件を選んでこれを分類した。この真理こそは、サタンの怒りと、世俗を愛する教会の敵意をひきおこし、しかも「死に至るまでそのいのちを惜しまなかった」人々によって維持されてきたものである（黙示録 12：

11)。

こうした過去の記録の中に、われわれは、われわれの目の前にある争闘があらかじめ示されているのを見ることができる。これらを見言葉の光と聖霊の解明とによって見るときに、われわれは悪魔の策略を見破ることができ、そして、再臨の時に主の前に「傷なき者として」立つ者が避けなければならない危険をも、見分けることができるのである。

過去の宗教改革運動において起こったいくつかの重大事件は、歴史的事実であって、プロテスタントの世界によく知られ、あまねく認められている。これらは、だれも否定することのできない事実である。著者は、簡潔を旨とする本書の扱い得る範囲内で、この歴史を短く述べた。各事実は、その適用の十分な理解を妨げない程度に縮めて簡単に書かれている。また、歴史家が諸事件を短くまとめて、問題の総合的観察を行ない、要領よくその細かい部分を要約している場合には、その言葉を引用した。その際必ずしも出所を明示しなかったが、それは、その言葉を引用したのはそれらが主題を巧みに力強く提示していたからであって、その筆者を権威として引用することが目的ではなかったからである。現に改革運動を推進している人々の経験や意見を述べる場合にも、その著作について同様の取り扱いをした。

本書の目的は、過去の争闘に関する新しい事実を提

示することよりも、むしろ未来の諸事件に関する事実と原則とを明らかにすることにある。しかし、こうした過去のすべての記録を、光と暗黒との間の争闘の一部分として見るとき、そこには新しい意義が認められるのである。そして、これらの諸事件は、未来に光を投げ、過去の改革者たちのように、神の召しを受けて、この世のすべての幸福を犠牲にしても「神の言葉とイエス・キリストの証のために」立つ人々の道を、照らすのである。

真理と誤謬との間の大争闘の模様を解明すること、サタンの策略を明らかにし、これに抵抗して勝利する方法を示すこと、神は正義と慈愛をもって被造物を取り扱われるということが明らかになるよう、罪の起源とその最終的処置に関して光を投げかけつつ、悪という大問題に満足のゆく解決を与えること、そして神の律法が聖であって不変のものであることを明示すること—これらが本書の目的である。人々が、本書によって、闇の力から救われ、「光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者」となり、われわれを愛し、われわれのためにご自身をささげられたかたを賛美するようになることを、著者は心から祈っている。

E・G・ホワイト

## 第2部

### 終末時代における

### 霊の賜物

R・F・コットレル  
(初代文集 p238 ~ 253)

預言の賜物は、ユダヤ時代の教会に現わされた。しかし、その時代の末期の数世紀間には、教会が墮落したために、現われなかったが、その末期において再び現われ、メシヤの来臨を告げた。バプテスマのヨハネの父、ザカリヤは、「聖霊に満たされ、預言して言った」。シオメンは、正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいたが、御霊に感じて宮にはいった。そして、イエスについて、「異邦人を照らす啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」と預言した。そして、女預言者アンナは、彼のことを「エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた」。また「世の罪を取り除く神の小羊」をイスラエルに紹介するために神に選ばれたバプテスマのヨハネより偉大な預言者はいなかった。

キリスト教時代は、霊の賜物が注がれて始まり、信者の間に、様々の霊の賜物があらわれたのである。このようなことが非常に多かったので、使徒パウロは、コリントの教会に、「各自が御霊の現われを賜わっているのは、全体の益になるためである」と言うことができたほどである。すなわち、これは教会の中のすべての人のことであって、多くの人々が解釈したように、世界のすべての人のことではない。

大背教が起こってからは、こうした賜物は、あまり現われなくなった。このために、一般キリスト者たちは、霊の賜物は初代教会に限られたものと思うように

なったのであろう。しかし、賜物が与えられなかったのは、教会の誤りと不信のためではないだろうか。そして、神の民が神の戒めとイエスを信じる信仰とによって、初期の信仰と行為とに立ち帰るときに、「後の雨」は、再び、賜物を生じさせるのではないだろうか。昔、起こったことがまた起こることを期待することができる。ユダヤ時代は、その背信にもかかわらず、その初めと終わりとに特別の神の霊の現われがあった。以前の時代と比較するならば、その明るさは、弱い月の光に対して、太陽の光にたとえられているキリスト教時代が栄光のうちに始まって、人に知られず衰微してしまうとは考えられない。キリストの初臨に対して、人々に準備を与えるために、霊の働きが必要であった。であるから、特に最後の時代は、過去のあらゆる時代よりも危険で、偽預言者が大きなしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするのであるから、再臨のためには、霊の働きがさらに必要である。「そして彼らに言われた、『全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる』」(マルコ 16：15 - 18)。

キャンベルは、「信者には、このような奇跡的力が伴う」と訳している。賜物は、使徒だけに限らず、信者たちにも及んだ。だれに与えられるのだろうか。それは、信じる者にである。どれだけの期間だろうか。そこには、制限がない。約束は、福音を伝えて、信じる最後の者のところまで行けという大任命と平行している。

しかし、この助けは、使徒たちと、彼らの説教によって信じた者たちだけに約束されたものであり、彼らはこの任命を果たし、福音を確立したのでその賜物はその世代で終わった、という反対がある。では、大任命は、その世代で終わったのであろうか。マタイ 28 章 19 節 20 節、「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのを守るように教えよ。見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」。

この任命のもとにおける福音の宣教は、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」という約束によって、初代教会で終わっていないことが明らかである。彼は、わたしは、あなたがた使徒たちと地の果てまで、どこでも共にいるとは言われず、世、すなわち時代の終わりまで、いつも、あなたがたと共にいると言われた。これは、ユダヤ時代であるとは言えない。その時代は、十字架で終わってしまった

た。であるから、原始的福音の宣教と信仰とには、常に同じ霊の助けが伴ったのである。使徒に対する任命はキリスト教時代に属し、その全体を包んでいるのである。結局、賜物は、背信によってのみ失われたものであって、原始的信仰と行為の復活と共に、回復されるものである。

コリント第一の手紙 12 章 28 節には、神が教会の中に、ある一定の霊の賜物をお与えになったことが記されている。神が賜物を除かれたとか廃されたとか言う聖書的証拠はないのであるから、われわれは、賜物が存続するものとして計画されたものであるという結論を下さなければならない。では、賜物が廃されたという証拠はどこにあるだろうか。ユダヤ的安息日が廃されて、キリスト教的安息日の制定が記されている同じ章、すなわち不法の秘密の力と不法の者のことが記されているところである。しかし、反対者は、賜物が止むという聖書的証拠が次の聖句のなかにあると主張する。「愛はいつまでも絶えることがない。しかし、預言はすたれ、異言はやみ、知識はすたれるであろう。なぜなら、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。全きものが来る時には、部分的なものはすたれる。わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなになった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。

わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。このように、いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛とこの三つである」(コリント第一・13:8-13)。

この聖句は、霊の賜物と、そして、信仰と希望もまた止むことを預言している。しかしそれらは、いつ止んだのであろうか。われわれは、なお、

「希望が、喜ばしい実を結び、信仰が、現実となり、祈りが賛美となる」

その時を待望しているのである。

それは、全きものが来て、鏡に映して見るようにおぼろげではなく、顔と顔を合わせて見るときに、止むのである。全き日が来、義人が完全になり、見られているように見るのは、まだ将来のことである。罪の人が、大人になり、「幼な子らしいこと」、すなわち、預言、異言、知識、また、原始的キリスト者たちの信仰と希望と愛とをも捨ててしまったことは事実である。しかし、この聖句の中には、神が、教会の中に置かれた賜物を取り去ろうとされたことを示すものはなにもない。それは、教会の信仰と希望とがその頂点に達して、この地上のどんな輝かしい霊的力と知識の現われも不

死の状態のすばらしい栄光にのみこまれてしまうまでは、取り去られない。

ある人々は、テモテ第二、3章16節に基づいて、さも重大なことのように反対を唱えるが、これは、取り上げるほどのものではない。聖書は、神の人が、あらゆる良いわざに対して十分な準備ができて、完全にととのえられた者になるためであるとパウロが書いて、もうこれ以上、靈感によって書かれるものはないと言ったとするならば、彼は、その瞬間において、なぜなお聖書につけ加えていたのだろうか。なぜ彼はこの文が終わったところで、すぐに筆をおかなかつたのだろうか。また、ヨハネは、それから三十年後に、黙示録を書いたのだろうか。黙示録には、また、霊の賜物は廃されたということを証明するために用いられるもう一つの聖句がある。「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる」(黙示録22:18,19)。

神は、むかしは預言者たちによりいろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られた。また、福音時代の初めには、イエスと使徒たちによって語り、その後は、このような方法では二度と語らないと厳粛に

約束されたのである。この聖句に基づいて主張する人々がある。したがって、その時以後の預言はすべて偽りであり、これで靈感による聖典は終わった、と主張するのである。もしそうだとすれば、なぜヨハネは、パトモスからエペソに帰ったあとで、彼の福音書を書いたのだろうか。彼は、福音書を書いて、パトモス島で書かれた書物の預言の言葉に加えたのであろうか。加えたり、取り除いたりしないようにという警告は、今日の聖書全巻のことではなくて、使徒が書いた黙示録のことを指していることは、聖句から明らかである。しかし、人間は、だれひとりとして、神の靈感によって書かれた他のどの書にも加えたり、除いたりする権利をもっていない。ヨハネは、黙示録を書いて、ダニエルの預言書に何かを加えたのであろうか。いや、そういうことはなかった。預言者は神の言葉を変える権利を持たない。しかし、ヨハネの幻は、ダニエルの幻を確認し、そこで提示された主題に多くの追加的光を与えている。であるから、主は沈黙を余儀なくされるのではなく、なお自由にお語りになると考えられる。主よ、あなたが望まれる人を通して語って下さい。あなたのしもべは聞きますと、常に自分の心の中で言っていたと思うのである。

こうして、霊の賜物は廃されたということを聖書から証明しようとする試みは、完全な失敗であった。そして、黄泉の力も教会に打ち勝たず、神は、この世に

なお民を持っておられるのであるから、われわれは、第三天使の使命に関連して、賜物が現われることを期待してよいのである。この使命は、教会を使徒時代の状態に引き戻し、世の、暗黒ではなくて、真の光とするものである。

また、われわれは、最後の時代には、偽預言者が起こるといふ警告を受けている。そして、聖書には、われわれがその真偽を見分けることができるように、彼らの教えをテストする方法が示されている。

預言者の預言とその道徳的品性の両方に当てはまる大テストは、神の律法に照らしてみることである。もし最後の時代に、真の預言がないとすれば、そのことを告げて、欺瞞が起こる原因を絶ち切ることのほうが、ちょうど本物と偽物とがあるかのように、その見分けかたを示すよりも、どんなにやさしいことであろう。

イザヤ書8章19、20節は、現代の霊媒についての預言で、そのテストとして、律法があげられている。「律法と証とに求めよ。もし彼らが、この言葉に従って語らないならば、それは彼らのうちに光がないからである」(欽定訳)。もし、同時に、真の霊の現われ、または預言がなかったのであれば、なぜ、「彼らが、この言葉に従って語らないならば、それは彼らのうちに光がない」と言うのであろうか。イエスは「にせ預言者を警戒せよ。……あなたがたは、その実によって彼らを見分けるであろう」と言われた(マタイ7:15,16)。

これは、山上の垂訓の一部であって、この説教は、福音時代を通じて、一般に教会にあてはまることは、明白である。偽預言者は、その実によって識別することができる。言いかえるならば、彼らの道徳的品性によってである。その実が善いか悪いかを決定する唯一の標準は、神の律法である。こうして、われわれは、律法と証の重要性を知るのである。真の預言者は、この言葉に従って語るだけでなく、それによって生活するのである。このように語り生活する人を、非難することはできない。

偽預言者の特徴は、常に、彼らが、平和の幻を見ることであった。彼らが、「平和だ、無事だ」と言っている時に、突如として滅びが彼らをおそってくる。真実な者は、大胆に罪を譴責して、来たるべき怒りについて警告を発するのである。

聖書の明快で積極的な宣言に反する預言は、拒否しなければならない。救い主は、彼の再臨の模様について、弟子たちに警告を発せられたときに、そのようにお教えになった。イエスが弟子たちの見ている前で昇天されたとき、イエスは、天に上っていかれるのを彼らが見たのと同じ有様で、またおいでになると、天使たちははっきり言ったのである。であるから、イエスは、最後の時代の偽預言者たちの働きを予言して、「『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行くな。また『見よ、へやの中にいる』と言っても、信じるな」と言わ

れた。この点についての真の預言はすべて、彼が目に見える姿で天から来られるというものでなければならない。「その時には、すべての預言を拒否しなさい。なぜなら、その時、真の預言者はいないからである」となぜ、イエスは、言われなかったのであろうか。「そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである」(エペソ 4:11 - 13)。

キリストは、天に上られたときに、人々に賜物をお与えになったことが、この聖句によってわかる。その賜物のなかに、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師などが挙げられている。これらがお与えされた目的は、聖徒たちをととのえて、一致と知識に至らせるためであった。今日、牧師であり教師であると言っている人々の中には、これらの賜物は、千八百年前にその目的を完全に達成したので、今はもう止んだのだと言う人がいる。それではなぜ牧師や教師という称号も廃業しないのだろうか。もし、この聖句の預言者という務めが、原始教会だけに限られたものであるとすれば、伝道者やその他の務めもみなそうである。そこにはなんの区

別もなされていないからである。

さて、この点について、少し考えてみたい。これらの賜物はみな、聖徒たちをととのえて、一致と彼を知る知識とに到達させるためであった。初代教会は、それらの影響のもとにあって、しばらくの間、一致を保っていた。「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして」いた。そして、このような一致の当然の結果として、「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」(使徒行伝4:32-33)。今日、このような状態がなんと望ましいことであろう。しかし、背教が起こって、分離と暗い影が美しい教会を傷つけ、教会は荒布をまとった。分裂と混乱が起きた。キリスト教会において、今日ほど、信仰が大きく分裂した時はなかった。原始教会において、一致を保つために賜物が必要であったならば、今日、その一致の回復のために、賜物がどんなに必要なことであろうか。そして、神が、最後の時代に、教会の一致を回復しようとしておられることは、預言が明らかに示しているところである。見張びとは、目と目を相合わせて、主がシオンに帰られるのを見ると約束されている。また、終わりの時に、賢い者は悟ると約束されている。これが成就するときに、神が賢い者とみなされるすべての者の中に信仰の一致が起こる。なぜなら、実際に正しく理解する者たちは、必然的に同様の理解に到達するはずだ

からである。このような目的のために与えられた賜物を除外して、他にこの一致をもたらすものがどこにあるのか。

このように考えてくるときに、ここに予言されている教会の完全な状態というのは、まだ将来のことであることは明白である。従って、これらの賜物は、まだその目的を果たしていないのである。エペソ人への手紙は、紀元64年に書かれた。それは、パウロが、わたしは今や自分を犠牲にしようとしている。わたしが世を去るべき時はきたとテモテに言う約二年前のことである。背信の種は、今や、教会の中で発芽しつつあった。なぜなら彼は十年前に、テサロニケ人への第二の手紙のなかで、「不法の秘密の力が、すでに働いている」と書いたからである。狂暴なおおかみが、はいり込んできて、容赦なく群れを荒らそうとしていた。そのとき、教会は、この聖句に言われている一致による完全に向かって進まず、党派に分かれて、分裂しようとしていた。使徒パウロは、これを知っていた。彼は大背教のかなたを眺め、神の残りの民が集められるのを見て、「わたしたちすべての者が神の子を信じる信仰の一致」に到達すると言った(エペソ4:13)。であるから、教会におかれた賜物は、まだ、その務めをなし終えていないのである。

「御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守り」な

さい(テサロニケ第一・5：19－21)。

この手紙のなかで、使徒パウロは、主の再臨のことを述べている。それから、彼は、その時の不信仰な人々が、「平和だ無事だ」と言っている時に、夜の盗人のように、突如として滅びが彼らをおそってくることを描写している。そして、彼は、このようなわけであるから、目を醒まして慎んでいるように勧めている。彼の勧告のなかに、前述の「御霊を消してはいけない」などの言葉がでてくる。この三つの聖句を、互いに全く関係のない別々の聖句であると考えた人がある。しかし、これらは、その順序に従って、自然に結び合わされている。御霊を消す人は、御霊の結ぶ当然の実である預言を軽んじる。「わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言を」する(ヨエル2:28)。「すべてのものを識別して」という表現は、ここで扱われている預言という主題に限られているのであって、われわれは、神がみ言葉の中にお与えになった識別法によって、霊を試みなければならないのである。霊的欺瞞や偽りの預言が、現在満ちあふれている。そしてこの聖句は、この点についても特に当てはまるに違いない。しかし、使徒パウロが、すべてのものを拒否せよ、とは言わずに、すべてのものを識別して、良いものを守れ、と言っているのに注意しよう。

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老

人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ。わたしはまた、天と地とにしるしを示す。すなわち血と、火と、煙の柱とがあるであろう。主の大いなる恐るべき日が来る前に、日は暗く、月は血に変わる。すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある」(ヨエル 2：28－32)。

最後の時代に聖霊が注がれることを語っているヨエルのこの預言は、福音時代の最初にすべて成就したのではない。これは、「主の大いなる恐るべき日」を前に、天と地とにしるしが現われることを見ても明らかである。すでにこのしるしは現われたけれども、その恐るべき日はなお将来なのである。福音時代全体を、最後の時代といえることができようが、過去千八百年間を最後の時代と言うことは不合理である。それは、主の日に及び、神の民の救済に至るものである。「それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある」。

主の大いなる恐るべき日にさきがけるしるしと奇跡の中に存在するこの残りの者は、疑いもなく、黙示録 12 章 17 節に語られている女の残りの子らであって、地上の最後の世代のことである。「龍は、女に対して怒

りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」。

福音教会の残りの者は、賜物を持っている。彼らは、神の戒めとイエスのあかしを持っているために戦いをいどまれるのである(黙示録 12:17)。黙示録 19:10 には、イエスのあかしは、すなわち預言の霊であると言われている。「わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である」と天使は言った。黙示録 22:9 には、同じことが繰り返されて、次のように言っている。「わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちと同じ僕仲間である」。このような比較によって、「イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」という言葉の意義の重要性を悟るのである。しかし、イエスのあかしとは、一つの霊のすべての賜物を含んでいる。「わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みを思って、いつも神に感謝している。あなたがたはキリストにあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にもすべての知識にも恵まれ、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現われるのを待ち望んでいる」(コリント第一・1:4-7)。キリストのあかしはコリントの教会

において、確かなものとされた。そして、その結果は、どうであっただろうか。彼らは、恵みの賜物にいささかも欠けることがなかった。そこで、残りの民は、イエスのあかしに堅く立ち、恵みの賜物に、いささかも欠けることがなく、われわれの主イエス・キリストの現われを待ち望んでいるのであるという結論を下してもよいのではなかろうか。

R・F・コットレル

## 第3部

証の書の重要性

イエスの証＝預言の霊

イザヤ書 8:20 ただおきてと証とに求めよ。もし彼らがこの言葉によって語っていなければ、それは彼らの内に光がないからである。(欽定訳)

ヨハネの黙示録 1:1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使をつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。

アモス書 3:7 まことに主なる神はそのしもべである預言者にその隠れた事を示さないでは、何事もなされない。

ペテロの第一の手紙 1:10 この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。1:11 彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。

ヨハネの黙示録 12:17 龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。

ヨハネの黙示録 19:10 そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなた

と同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」。

ヨエル書 2:28 その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。2:29 その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ。

テサロニケ人への第一の手紙 5:19 御霊を消してはいけない。5:20 預言を軽んじてはならない。5:21 すべてのものを識別して、良いものを守り、5:22 あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい。

歴代下 20:20 「ヨシャパテは立って言った、『ユダの人々およびエルサレムの民よ、わたしに聞きなさい。あなたがたの神、主を信じなさい。そうすればあなたがたは堅く立つことができる。主の預言者を信じなさい。そうすればあなたがたは成功するでしょう』」。

「むかし、神は預言者や使徒たちの口によって人々に語られた。この時代には、神は聖霊のあかしによって人々に語られるのである。」(5T661)

「わたしの働きは…神の印を帯びているか、それとも敵の印を帯びているかである。このことにおいて中途半端はない。証は神の霊であるか、それとも悪魔か

らのものであるか、そのどちらかである。」 (4T230)

「真の証人のあかしは半分も留意されていない。教会の運命がかかっている厳粛なあかしはまったく無視されなくとも、軽視されている。」 (1T181)

「わたしは証に対する不信が、民が神から離れるにつれ、着実に増していくのを見せられた。それが我々の教会のあらゆる階層で、各地いたるところで見られる。」 5T76.

「神の明確な言葉と御霊の証に反する精神が存在する。神の啓示された知恵よりも、単に人間の理性を偶像視し、高める精神がある。責任ある立場の人たちの中で、聖書の真理または御霊の証よりも、数人の思いあがったいわゆる学者の意見が信頼されるべきだと考えている人たちがいる。」 5T79.

「最後の時代の危機のさなかに光（ホワイト夫人をとおして神の民に輝くようにされた光）をもっとも必要としている神の民からこの光をさえぎることがサタンの特別な目的である。」 (5T667)

「サタンの最後の欺瞞は神のみ霊の証を無効にすることである。」 (ISM48)            20世紀の初頭に、わが教会に恐るべき背教が起きた。それを背教のアルファ（初め）と呼んだ。わが教会は大きな打撃を受けた。

『『生ける宮』という本の中には致命的な異端のアル

ファ(最初)が提示されている。オメガ(最後)が続くであろう。それは神が与えた警告に留意しない者たちによって受け入れられるであろう。」(シ-ズ B # 250)

「まもなくオメガが続くことをわたしは知っていた。そしてわたしはわが民のために身震いした。」(同上 53)

「だまされてはならない。多くの者は信仰から離れるであろう。…今我々の前にあるのはこの危険なアルファである。オメガは最も驚くべき性質のものである。」(ISM197)

「サタンの最後の欺瞞は神のみ霊のあかしを無効にすることである。…サタンは巧妙にいろいろな方法で、間違った器を通して残りの民が真のあかしを信頼しないように働くであろう。」(レ- 12 1890)

「主がエレン・G・ホワイトを通して語られ、メッセージを与えられたことを信じるすべての者は、最後の時代にやってくる多くの欺瞞から安全に守られるであろう。」(3SM84)

「時も試練も与えられた教訓の効力を失わせなかった。…この教会の初期に与えられた教訓は、その終末時代においても信頼できる教訓であると思われなければならない。」(ISM41)

「この教会の初期に与えられた原則は、当時と同様

に、今日も重要で、同じように良心的に尊重すべきことを示された。」(9T158)

「あなたがあかしの信頼を失うならば、あなたは聖書の真理から押し流されてしまうであろう。」(7T98)

「神の民の、1) あかしの書に対する信仰を弱めさせることが、サタンの計画である。2) 次に我々の信仰の重要点、我々の立場を明らかにする柱(複数)に関する懐疑が続く。3)それから聖書に関する疑いが続き、4)そして破滅に降下していく。かつて信じられてきたあかしの疑われ、捨てられると、サタンはそこでとどまらないことを知っている。彼は努力を二倍にして公然の反逆を展開し、それはいやしがたいものとなり、破滅に終わるのである。」(4T211)

「ひとつの確かなことは、サタンの旗の下に立つセブンスデー・アドベンチストはまず神のみ霊のあかしの含まれている警告と譴責に対する信仰を捨てるであろう。」(1SM84)

「非常に巧妙にある人たちは、半世紀のテストに耐えてきた警告と譴責のあかしの無効にしようとして働いてきた。それでいて、同時に、そんなことは全然していないと拒否するのである。」(シ-ズ B#7 31)

「あかしの書に対するサタンの憎しみの火が燃え上がるであろう。…神のみ霊の警告と譴責と勧告が留意されるならば、サタンは欺瞞を持ちこむすべを知ら

ず、欺きの中に魂を閉じ込めることはできないことを知っている。」(1SM84)

「時が近づけば近づくほど、最後の警告を与える働きが世界に広まれば広まるほど、現代の真理を受け入れるものにとって、あかしの書の性質と影響を理解することはますます重要になってくる。神はその摂理の中に、三天使の使命の働きが起こった時から(イエス)のあかしを結びつけられたのである。」(5T654)

「あかしの書を公然と拒否したり、疑いを抱くものだけが危険な立場にあるのではない。光を軽視することは拒否することである。」(5T680)

「勧告、譴責、警告の中に光と知識が与えられている書物を読まないために、多くの者は、神がその民に与えられた光に全く反して歩んでいる。」(5T681)

「世の思い煩い、流行を愛すること、宗教(信心)の欠如は、神が恵み深く与えられた光から注意をそらした…」(5T681)

「ひとつの言葉でもなく、多くの言葉でもなく、神が語られたすべての言葉によって人は生きるのである。たとえとるに足らないことのように見えても、ひとつの言葉さえ軽視することはできない。」(LU182)

「あかしの書に関して、一つも無視されてはならない。ひとつも捨てられてはならない。しかし、時と場

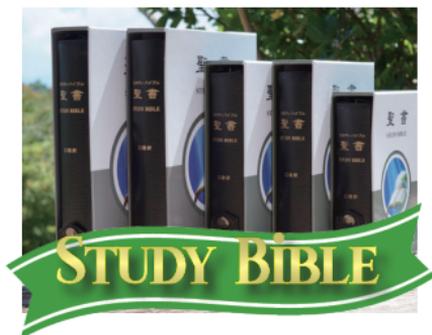
所を考慮すべきである。…一点一画も重要であるし、  
適当な時期に現れなければならない。」(ISM57)

「安息日、人の性質、イエスのあかしという主題は  
危機の時代に神の民を守る錨である」(IT300)

「我々が現代の真理にしっかり立って、望みを持って  
第二の幕の中に魂の錨を下ろすならば、さまざまな  
偽りの教えや、誤りの風は、我々を動かすことはでき  
ない。」(IRH11)

故に背教のオメガはあかしの書、聖所、安息日、人  
の性質に矢を向けてくるであろう！

もっと詳しく研究なされたい方のために...



## スタディバイブル

口語訳・注解・  
脚注引照付き・地図  
チャート・聖句索引

¥8,000～

色はすべて黒で本革を使用

宇宙の謎、地球の謎、人生の謎に真実の解決を与えるのは聖書だけです。スタディバイブルは自分で研究できるように編集されています。

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

終末時代における霊の賜物 - リバイバルシリーズ -

※頒布価格 100円

発行 平成 24 年 1 月 16 日

発行所 サンライズミニストリー

〒 905-0428

沖縄県国頭郡今帰仁村今泊 1471

電話 0980-56-2783

FAX 0980-56-2881

Email [info@sunriseministry.com](mailto:info@sunriseministry.com)

[www.sunriseministry.com](http://www.sunriseministry.com)



# リバイバル小冊子シリーズ

---

No.1 安息日問答

No.2 アピール

No.3 装身具について

No.4 狭き道の旅

No.5 リバイバルと改革

No.6 神の聖安息日の遵守

No.7 今

No.8 終末時代における霊の賜物

No.9 小さな光と大きな光

No.10 預言の霊に関する指導原理

No.11 サタンのわな

No.12 人類が直面している世界情勢

No.13 田舎の生活

No.14 十戒

No.15 主のぶどう園

No.16 背教のアルファ

No.17 終わりの時に備えよ

No.18 どのようにして安息日を守るのか

No.19 キリスト論

No.20 救いの確証

No.21 もうひとつの箱船

